
Destiny Gate

エア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Destiny Gate

【NZコード】

N9502C

【作者名】

ヒア

【あらすじ】

公園で出会った謎の爺さんの予言どおり死んでしまった神谷慶。ところで皆さんは死んだ後どこに逝くと思いますか？天国？地獄？まあ普通の人はそうだけど彼の場合は少し違った。彼が向かつたその先は3番目の選択肢その名は” DESTINY・GATE ”

第1話・前夜

学校中に今日最後の授業終了の鐘の音が鳴り響く。

大抵の生徒は帰り支度をすませ担任が来るまでの短い間を友達と多和いもない話をしているものだが、ここに一人の例外がいる。

神谷 慶。彼は一人本来は立入禁止の屋上で寝転がっていた。秋空を流れる雲をぼーっと見ながら一つ、大きな欠伸をかくと

「超ネームい・・

と、一言呟いてそのまま寝てしまった。

数時間した後、あまりの寒さに眼が覚めた。眠気眼で起き上がり辺りを見回せば、すっかり日も暮れた秋の夜。全ての部活が活動を終え、僅かに明かりが着いているのは用務室だけだった。

慶はおもむろにポッケから携帯を取り出すと、そこに表示された時間を見て驚くと共にダッシュで家路へとついた。

現在の時刻は夜の7時53分。

「後、7分・・

慶は全速力で走り続けていた。慶がこんなにも急いでいるのは、慶の家には厳守すべき規則があるからだ。

それは門限は例え、男子であろうと夜8時までというものだ。これを破れば空手師範の親父、神谷 陣八の制裁が待っている。過去三回。それは今までに慶が地獄を見た回数。それを思い出しただけで全速力で走り続け、ほてつた体にも寒気が走った。

しばらくして、慶の眼の前にこちらでは一番大きい公園の入口が

見えてきた。この時点で残り時間は後4分、このままでは1分遅れてしまつ。

しかし今眼の前にある公園を突つ切れれば後3分で家に着くことがで
きる。普通なら迷わず突つ切るが、慶は入口の前で立ち止まつた。

北上台公園。

それがこの公園の名称である。

昼間は子供連れの母親達の社交場であり、園内に植えられた様々な
木や花が季節を彩る。しかし普通の公園だが、一度夜になると話は変わ
る。

不良のたまり場となり今の不景気なご時世だと、首吊り自殺を謀る
者や幽霊を見ただの通れば何かに絡まれること間違いないし、黒い噂
が絶えない公園である。

今、慶の中では天秤がフラフラと揺れながらどちらがより重いか決
めかねている状態だ。

公園を通るか、親父の鉄拳を喰らうか、

数秒考えると一つの結論が出た。

覚悟を決めた慶は全速力で公園の中へと入つて行く。

できれば何も見ないよう下を向きながら走る慶、広い敷地と生い
茂る木々が外界との接触を無くし、一種の無法地帯とも言えるこの

公園。

100メートル程走ると少し先の方で、慶が通る予定の道の端で一
人の老人が3人の若者に暴行を受けているのが見えてきた。
老人は薄汚れた赤いニット帽を被つたいわゆるホームレスのようだ
った。

（うわ～嫌なもん見ちつたよ）

このまま走り抜けたいところだが、またしても頭の中で天秤がコラコラと揺れ始めた。

追い払おうと思えばやれないことはない。親父が空手の師範だけに慶自身の強さも中々のもの。

しかし老人を助ければ空手師範の制裁が、迷う慶。老人はもう眼の前に迫っている。

（オレには、関係ない・・・）

そう思つて老人の前を駆け抜けようとした時、一瞬、老人と慶の眼が合つた。

慶は走るのを止めた。

「まったく、損な性格だぜ、」

自分の性根が思つたより腐つてなかつた事にやれやれと思ひながら、慶の眼に力が宿る。

「おい、アンタ達いい加減にしたら？」

「は？」

慶の呼びかけに三人組は暴行を止め、新しいオモチャでも見つけたような顔で慶の元へと歩みよつてきた。

「なにオマエ？ 正義のヒーローのつもり？ そんな真剣な顔しちゃつてさバカじやないの？」

「そんだけやれば充分だろ」

「なに言つてんの、まだまだ遊びたんねえよ。なんならお前とも遊んで上げよう・・か！」

三人組の一人の拳が慶日掛けて飛んでくる。

「ヒヤハツ！」

他の一人はその様子を笑いながら見ていたが、二人の期待に反して男の拳は慶の顔面に届くまえに簡単にいなされ代わりに慶の拳が相手の腹に深々と突き刺さっていた。

「ぐわっ・・・！」

相手は慶の技の速さに何が起こったかもわからないと言つた顔で腹を抑え、苦しみながら慶を見上げていた。

「早く帰れ、これ以上やられたくなかつたら・・・」

慶に睨まれ、他の一人もレベルの違いを感じとつたのかそそくかと逃げて行つた。

「ふう・・・」

一息つき、老人の方を見ると、驚いたといつた表情で慶のことを見ていた。

「大丈夫かじいさん？」

「あ、ああわしは大丈夫だが、少年は随分強いんだな」

「まあね」

携帯に目をやると既に8時の門限を5分程過ぎており、覚悟のうえとはいえ親父の事を想像するとため息が出てしまう。

「じゃあな、これからはあんまりこの公園には来ない方がいいぜあんなのばっかりいるから」

「待つてくれ！何か、礼をしたいんだが」

「いいよそんなの、悪いけど爺さん貧乏そうだし」

慶がこれから起きる制裁を想像してブルーになりながら歩み始める
と、後の方で爺さんが何かをボソボソと口を動かしている。

「明日は・・家からでない方がいい」

唯一聞き取れた言葉に一瞬歩みが止まる。

「明日は家からでるな。良くない事が起きる。これが礼だ」

「なんだそれ？占いか？生憎そつゆうオカルトなのは信じない主義
なんで」

「占いではない。予言・・いや、真実だ。部屋から一步も動いては
ならんぞー。そもそも少年は必ず死ぬ」

死ぬという単語に体が固まり、完全に歩みが止まった。
慶にとって、

「死」とはもつとも恐ろしい言葉だからだ。過去の、自分も死にか
け、そして自分をかばって親友が死んだ。その記憶がどんどんと蘇
つてくる。「簡単に死ぬとかいつな、」

相手の軽はずみな発言に怒り心頭で振り向いたが、そこには先程ま
での老人の姿は跡形もなく消え去っていた。

「あれ？」

辺りを見渡しても誰もいない。

「もしかして今の爺さん、幽霊？いや、まさかそんな訳が」

無理に笑おうとしているが恐怖に顔が引きつって逆に恐い顔になっ

ている。

「きっと、夢だ・・ハハ」

混乱した頭を抱えながら家路に戻った慶を先程の老人が遙上空から見下ろしている。

「それにしても死ぬには惜しい男だ。このまま成長すればいつか大業を成しえるかもしない器だ」

老人は少し考えるとおもむろに右腕を前へ突き出した。すると、一本の木製かと思われる杖が現れ、その先端を力無くとぼとぼ歩く慶の方へと向けた。

「オン、アーク」

老人咳きに呼応して杖の先から無色透明のものが飛び出すると、それは慶の胸へと張り付いた。

「ワシの予言は必ず当たる。少年は明日死ぬ。だが資格を与えよう。それをどう使うかは少年次第だ」

空中に浮いている謎の老人の姿は都会の星も瞬かないような明るい夜空だというのに水が蒸発して水蒸気になるように跡形もなく消えていった。

第2話・予言的中

翌日早朝、

慶の部屋では目覚まし時計がけたましい音を立てながらかれこれ3分程鳴りまくり続いている。

「朝、か・・グハッ！？」

目覚まし時計を切り、起き上がるうとした瞬間全身を激痛が走った。

「き、筋肉痛か・・」

人助けとはいえ門限破りに変わりはなく、鉄拳の変わりに親父にしごかれにしごかれまくった慶の体は全身筋肉痛になり少し動いただけでも激痛が走るような状態だ。

「クソ、親父にはしごられるし、助けたホームレスには死ぬとか言われるし昨日は散々だぜ」

慶が制服に着替えようと床をはいつくぱりながら移動ていると部屋のドアが勢いよく開かれ、にこやかな笑顔でありながらそれとは正反対の怒気に満ちた母親が慶の目の前に立ちはだかった。

「何をやっているの慶？あなただけでさえ出席日数足りなくて留年しそうなんだから早く行きなさい！…！」

爽やかな秋晴れの朝から母親に怒鳴り散らされ、朝飯も食わずに家を叩き出された慶は重度の筋肉痛と闘いながら同じ学校の生徒が登校する中を親の文句を垂れながら歩いていた。

「ぜつてえ倒すあのクソ両親ども、帰つたらボコす・・」

そんな乱暴な言葉を吐きながらも相手は現役空手師範に母親は母親でかつては女三四郎と呼ばれた程の猛者である。

「いつか倒す、いつか・・・」

考えただけで弱気になってしまった慶の眼の前に昨日の公園が見え始めた。

『明日オマエは死ぬ！』

まるで気にしてなかつた老人の言葉が頭の中をぐるぐると回り始めた。

「見てくか」

慶の足はいつもの通学路ではなく公園へと向かつていった。

昨日老人がいた場所、公園の中を少し見て回つたが当たり前に姿は見当たらなかつた。

（何ナーバスになつてんだが、気にする必要もないか）

学校へと向かい始めた慶だが老人の戯言に振り回され、自分自身に呆れる一方で、この頃から心に引っ掛かる何か黒い不安が取れない感じが何とも気持ち悪かつた。

その日の学校も実に平和だつた。

いつも通り平穏に最後の授業も終わり、平穏に時間は流れる。

「おい、どうしたんだよ慶？ 今日いつもより調子悪くない？」

クラスメートの一人に声をかけられた慶の顔は青ざめ気味になつていた。

理由をあえて言葉にするなら、『感』としか言ひようはないが確かな気配を感じる。動物が災害を事前に察知して逃げ出すように、慶は何かがくるのを察知している。

そして昨日の老人の言葉。

慶は思う。

（オレに近づいて来ているのは『死』だ。）と、

家に、自分の部屋に帰るつと思い、全校生徒の中で一番早く学校をでた。

いつもの道を通り、あの公園を通り、家はすぐそこにある。

（着いたか、）

その時、耳を裂くようなブレーキ音を聞いて慶の意識はいったん途切れた。

次のシーン。

気がつくと眼の前には地獄絵図が広がっていた。

数台の車がひしゃげて折り重なりあり、人々が苦しみの声を上げている。

（何だコレ・・・）

そしてあることに気がつく。

（何も感じない）

不自然な程何も感じなかつた。下をふと見たことにより謎は解ける。自分の下に自分が転がっていた。血を流してボロボロになりながら。

一瞬で全てを理解した。

「うああああああーーー！」生者の世界で誰にも聞こえない叫び声を上げた哀れな魂は一陣の風に吹かれて跡形もなく消え去った。

突然、電灯をつけたような眩しさに眼が覚めた。

見回すと、そこは際限なく続くクリーム色一色に染まる空間だった。自分もクリーム色の椅子に座っている。天井も壁も無く、あると確実に分かるのは床だけであった。

「オレは、死んだのか・・・？」

今いる場所が自分が予想していた死後の世界とあまりにも違うので自分がどうなったのか、本当に死んだのかわからなくなっている。

「アナタは死んだのですよ」

急に真後ろから声がしたので、驚き振り返ると、一人の60代位の老人が立っていた。グレーがかかった長い白髪を後で束ね、同じくグレーの鬚を蓄えた老人。

この全てがクリーム色一色の空間に彼だけは黒いスーツを着ていた。

「神谷慶様ですね。私は普ふといいます。早速ですが後がつかえていますので決めて頂きたいと思います。」

「何を、ですか？」

いつの間にか椅子と慶の体が普ふの方へと移動していた。

「決まっているではありませんか。アナタは死人だ。死人が選ぶことが出来るのはこれからのおあなたの逝き先だけ、でござりますよ」

椅子に座つたまま慶は下を俯いている。

「どうかなさいましたか？」

「いや、何でもないです・・・」

慶の脳裏にあつたのは自分をかばつて死んだ幼なじみの姿だった。
(結局アイツにもらつた命たいして生きる前に失くしちましたな)

パチンシ

プフの指を鳴らした音が少し児玉してから、地面がカタカタと徐々に揺れ始め最高潮に達した時、地面から巨大な一枚のそれぞ黒と白の扉が現れた。

目の前に突如現れた一枚の巨大な扉ビビつて椅子からずり落ちた慶にプフが真剣な眼をしながら話し始める。

「さあ、この一枚の扉がそれぞ白が天国、黒が地国につながつており天国では次の肉体に宿るべく何不自由なくくらせ、地国では魂の管理者になるべく厳しい修業を経て死神となることができます。す。どちらを選択なさいますか？」

プフの話しの間慶はある一つのことを考え込んでいた。

「生き返るつてことは出来ないんですか・・・？」

「無理ですね。あなたの体はすでにこの世から消えております。魂が無事でも体が無ければ生き返るなど到底不可能でござります」

「頼みますよ！オレは、オレは死ぬわけにはいかないんだよ・・・」

興奮して掴みかかってきた慶をプフは冷ややかな眼で見下ろしていた。

「見苦しいですな・・

一撃、どうやったのかは不明だが慶でも見切れないスピードで腹を穿たれ、体はクリーム色の床へと倒れ込んだ。

「早めに決めて下さいませ、神谷慶様」

内臓に受けたダメージに慶は悶絶していた。頭と違い、内臓へのダメージは意識がハッキリとしている分その痛みを直に噛み締めなければならない。

「はっ、ハツ・・ハツ」

呼吸することすら困難な倒れ込んだ慶の視線の先に通常サイズの古ぼけた一枚の扉が見えた。（なんだ・・アレ？）

その扉が薄く開き、中から一人の少年が顔を出し慶を見ながらゆっくりと口を動かした。

「待ってるぜ？少年」

確かにそう呟いたように見えた。

少年はニヤリと笑うと扉の向こうへと戻つていった。

「あの扉が見えるのですか？」 プフが驚いた顔で慶を見ている。返事は困難なので軽く頷いた。 プフは失敬と一言いうと慶の胸ポケットを探り始め、慶の身に覚えのない一本の鍵を取り出した。

「雌雄同体の龍のマークが入ったカギ、アナタはスカウトにあつたのですね。ならあの扉が見えるのも道理。」

プフが片手を慶にかざすと先程までの内臓の痛みがとれ、同時に体が浮き、元の立ちの体勢へと直してくれた。

「早速説明いたしましょつかあの扉のことを」

またプフの指を鳴らす音が児玉したかと思つと慶とプフはいつの間にかその古ぼけた扉の前へと移動していた。

もしかしたら移動したのは扉の方かもしないがそれはわからないことだ。

「この扉の名前はDestiny Gateと、そう呼ばれてあります。この扉はアナタのようにカギを持つ者のみが使用可能で、もし扉の先にある異世界でその雌雄同体の龍の紋章が入ったカギで開けられる扉を見つけることができたなら願いが一つ叶うというものです」

「本当ですか！？」

自然に慶のテンションも上がる。願いが一つ叶うといふ事は生き返ることも叶うといふことだ。

「ただし、扉の先にどのよきな世界が広がっているかはまるでわからせん。獸ばかりの世界や荒廃した何も無い世界等、様々でござります」

「それでも、行きます。オレは死ぬわけにはいかないから」

（決意は固い、ようですね。それに、久しい。このよきは霸氣をもつ魂は）

プフの顔から自然に笑みが零れた。年甲斐もなく胸が高鳴る自分が可笑しかつたのだ。

慶のカギを指差してプフは言った。

「そのカギで扉を開けるのです。そうすれば向いの世界へと逝けます」

慶が扉を開けると、その先は闇だった。何もない闇だけ。

「神谷様、これをお持ち下さい」

「普フから渡されたのは獨特の狼のよつた紋章が入つたカギだ。

「これは・・?」

「そのうち、時が来たらお教へいたします。では、よい旅を」
普フが一礼すると慶の体は扉へと飲み込まれるように吸い込まれ、
扉はバタンッと勢いよく閉まつた。

「非常に興味深い少年ですね。ローゼン様」

いつの間にか普フの横にたつているローゼンと呼ばれているのはあの公園で慶に助けてもらつた謎の老人だ。

「まあな、久しぶりにワシの眼にかなつた奴だからな」

「しかし、Destiny Gateはどんな世界であろうと過酷、
前にこの扉から人が帰つてきたのは二百年程前ですか、その前はさら二百年。はたしてあの少年はどうなるか・・」

「見物だろ?」

ローゼンは楽しそうに笑う。

その時ローゼンからブーブーとバイブの音がして携帯電話を取り出した。

「これはまたハイテクな物を持つておりますな」

「ああ、便利なんぢやがどこに居てもすぐに捕まつちまつ。休む暇もありやせんよ」

「また呼び出しだすか?」

「ちよつゝへり行つてぐる」

「全神にはよろしく言つておいて下さい」
ローゼンは苦笑いするとスッと跡形もなく消えた。

慶は暗い空間を落下し続けていた。

「どこまで落ちんだよー！？」

あのクリーム色の空間で扉に飲み込まれた慶はすぐに落下し始め、かれこれ2分程落下し続けている。

ふと、暗闇しかない下に僅かな光が見えたかと思いつと暗い空間を抜け無数の光が瞬く無重力の空間へと飛び出した。

「I'm、宇宙か？」

僅かに光っていたのは宇宙に浮かぶ星であり、慶の眼の前には地球上にそつくりな惑星がドンと構えていた。

大陸の形には違いがあるが海や自然。その美しさたるや圧巻だ。フヨフヨと漂っていた慶の体が勢いよく地球のような惑星をぐるぐると廻るよう引つ張られはじめ、段々と惑星に近付いていく。

そのうち大気圏を突き破り、惑星を廻り続ける慶の体はやがて一筋の光となつて一つの大陸へと降り注いだ。

しばらくして気がついた慶が回りを見渡すとそこは都會育ちの慶があまり見ることのないような巨大な木々に囲まれた樹海のような所だった。

起き上がろうとした時、左の手首に身に覚えのないブレスレットがしてあり、あのブフという男にもらった鍵とDestiny Gateを開けた時の鍵が取り外し可能のように付けてあった。

(夢じゃなかつた・・・)

まだどこかであれば夢だつたんだと思ったかつた自分が崩れしていくのがわかつた。

「驚いた・・人がいたよ」

一人落ち込む慶の後ろからした突然の声に振り向くと、きのり風の一人の男が立つていた。

「どうしたんだこんな所で」

相手からしてみれば当然の質問だ。こんな所に人がいるのだ。驚くのも無理はない。

しかし、慶からしてみれば即答できる質問ではなかつた。こんな初対面にいきなり違つ世界から来た何て言われても信じるわけがない。

「答えられない事情でもあるのかい?」

少し不信に思いだし、帰ろうとする男を慶は必死に引き止めた。こんな木しかないような所でまた一人になつたら命の保証はない。まずは近くの人里に連れていつてもらうのが得策だ。

「待つてください!事情は言えないけど、妖しい者じゃないんだ。オレをどこか近くの街とか人がいる所に連れてつてくれ!いや、連れてつて下さ!...お願いします!」

必死に頼み込む慶。

武器も持たずに体一つのその姿に相手も警戒を溶いたようだ。

「いいよ。オレの村に連れてつてやるよ。」

「ありがとうございます!」

「オレの名前はアクヲだ」

そう言つてアクヲは慶に手をさしのべてくれた。

「神谷慶何て珍しい名前だな。漢字つてヤツで書くんだろ? 日国の人なのかい?」

「いや、まあはい。多分・・・」

村までの道のりをアクヲとたわいない話しが盛り上がつた。しばらく歩くと木の大きさも見慣れたサイズになり小鳥もさえずつてゐる。

見渡しても元の世界とあまり変わらない世界。 プフに散々脅かされたけど、この分なら死ぬことはないだろうと慶は軽く油断していた。

「見えてきた。あれがオレの村だ」

山の間にひつそりとある村。

非常にのどかな雰囲気だが、そこには不釣り合いな程美しい教会が建つていた。

「綺麗な教会だろ。君にはまずあの教会で教主様に会つてもうりつよ。旅人は教主様に会つのが決まりなんだ」

実際に教会に着くと、遠くから見るよりかなり大きく高層ビル等を見慣れている慶でも思わず見上げてしまうくらいだ。

「教主さま〜?」

中は中で壁も床も蒼いクリスタルのようなものでできていて、天井から降り注ぐ光を柔らかく反射している。

奥には黒く巨大な十字架が吊され、その下には白い女性の像があつた。

「なんじゃアクワ？」

奥の扉から一人の老人が現れた。その老人はどこかあの公園であつた老人に似ているきがした。

「教主様、旅人です。名前を神谷慶と言つせつです。」

「おお、そつか・・ん？」

教主は慶の左手首に着いている鍵を見て驚いた顔をした。

「旅の人、こちらへ来てくれ」

慶は教主に教会の奥の庭に面した小部屋に案内された。

「私の名前はオーシャンだよろしく。早速だが君のその手首の鍵。それは主神の鍵だな。世界を統べる主神しか持ちえないはずの鍵をどこで手に入れた？」

「それは・・」

「全てを話して欲しい。どんな寄な話であらうと聞こへ。」

慶は全てを話した。

例え信じてもらえなくとも誰かに聞いて欲しかつた。

少しの沈黙のあとオーシャンが口を開いた。

「なら君は旅に出るのだな？」

「はい」

当然の返事だ。

「なら準備する必要があるな。」

「旅の準備ですか？」

「それもあるが、それだけではない。戦闘の訓練も必要になる。君はこの世界を甘く見ているだろ？ 太陽の光が降り注ぎ、のどかな世界だと。だが実際はそうではない魔が蔓延る危険な世界だ。武術

の心得があるくらいではすぐに死ぬだろ?」

オーシャンは庭に出ると立て掛けた一本の剣を手に取った。機械的で白いボディに赤いストライプが入ったそれには剣には必要不可欠の刃の部分がない。

「この剣はこの世の太古からの技と現代化学の融合が織り成す神秘の武器だ。」

「でも、肝心の刃がないじゃないですか」

「この世界にはルーンと呼ばれるエネルギー体が存在する。ルーンは万物に宿り、ルーンが無ければ生物はたちまち死に絶え、どんなに強固な岩も砂塵に帰す。そして人間は長い歴史の中で体内のルーンを操る術を身につけ、それを化学と組み合わせる事でさらに強力な力を手に入れた。それがこの、スピリット・ギア（S・G）だ」

オーシャンの右手の平に黄緑色の風が渦巻き、やがて一つの球体になると左手に持つギアの柄尻にそれを叩き込んだ。

と、同時にギアの等身から黄緑色の刃が吹き出し見事に武器の姿を表した。

「ふん!」

オーシャンの一振りに近くにあつた木が真つ二つに引き裂かれた。

「すげえ・・」

「君にはこれを覚えてもらつ。リーシャ、リーシャよ

扉から一人の女の子が現れた。腰までかかる黒髪が綺麗な女の子。

「なんですか？教主様」

「この少年にS・Gの使い方を教えてやつてくれ」

リーシャの青い瞳と眼が会って慶はテレからか思わず眼を反らした。

「わかりましたー」つち来て、えーと名前は？」

「神谷、慶です」

「みのじく、慶くん」

丁度この頃この村の北西にある村が二体の魔獣より潰された。

日も暮れ始めた頃、村外れの丘で慶は一人落ち込んでいた。

「オレ、才能ねえなあ・・・」

あの後すぐにSGに挑戦した慶だったが補助用のリングを装着してもSGのエネルギー源であるローンを集束することすらできなかつた。

「そつか集束できなかつたか」

「はい」

教会の一室でオーシャンは茶菓子を食べながらリーシャの話を聞いていた。

「教主さま、SGも知らない何て彼は本当にただの普通の旅人なんですか？」

「ああそうだ。カズーの森で遭難している所をアクヲに発見されたただの旅人だ」

ごまかそうとするオーシャンだが違和感たっぷりの顔にリーシャが騙されるはずがなかつた。

「でも慶君は自分は異世界から来たと言つていましたよ」

「な、あのバカ者簡単に自分の素性を話よつて」

「教主さまは彼の言つている事は本当だと思いますか？」

オーシャンは本棚から一冊の古い本を取り出した。表紙には何も書

かれていないが背表紙に小さく

「シユトラー」と、書かれている。

「リーシャも知っているだろう。これはこの世界で最高の預言書と言われるシユトラーの書記だ」

「えー？ でも・・シユトラーの書記は世界立図書館に保管してあるはず。どうしてここに？」

「それはどうでもいいことだろ？ 本題はその書記の最後の方に書かれていてる少年の話しだ」

リーシャがパラパラとめくつていくと確かに少年についての記述がある。そこに書かれた内容はまさに慶ことであった。

「信じるしかあるまい。」

その時、村の方で突然、爆発音が響いた。

「なんだ！？」

リーシャ達が窓から村を見ると、一体の魔獣の姿が見える。

「私行つてきます！」

オーシャンが止めるのも聞かずSGを持つてリーシャが向かつたのと同じ頃、まだ丘で落ち込んでいた慶が村の方を見ると、日も完全に落ち沢山の星が瞬く夜空を照らすようにあちこちから火の手が上がっている

「何が起こつたんだ！？」

慶が村に戻ると村人達が我先に慶が今来た丘の方へと避難していく。村の中央にある噴水にたどり着いた慶は自分の眼を疑つた。これがオーシャンの言つていた魔なのかと理解した。

第6話・絶体絶命

回りを炎が囲む中、体長3メートルはある一体の牛のよつな魔獸は赤色の一体は噴水に座り、青色の一体は楽しそうに家を壊していた。

「ん～ん？」

慶の気配を感じたのか青色の魔獸が振り向いた。

（やば・・・！？）

咄嗟に近くのしげみに隠れた慶の心臓は弾けんばかりに音を立てている。

「氣のせい、か～？」

「違うぞ、兄弟！そこのしげみの中に誰か隠れたぞ！」

「あ～そうか～流石兄者～！」

巨体を揺らし、一定のリズムで地面を踏み締めながら確實に慶のもとに近付いてくる魔獸。

（クソ、どうする…どうするよオレ！？）

「見や～つけた～」

慶の隠れるしげみに魔獸が手をかけよつとした瞬間、一瞬、影が通り過ぎたかと思うと魔獸の右腕から緑色の血が吹き出した。

「誰だおまえ～」

魔獸の視線の先には怒りを燈した瞳で魔獸を睨みつけるリーシャの姿があった。

「こんなに村を田茶苦茶にして、絶対に許さない！」

「うお～女だ！女！女！女！」魔獸は自分の腕が切られたことも忘れたように跳ねて喜んでいる。

「切る！」

勢いよく魔獣の懷に飛び込んだリーシャだが華奢なリーシャの体に合わないSGの重さが振り上げるスピードを遅らせる。

「遅いんだよお嬢ちゃん」
体に似合わぬスピード。

噴水に座っていたはずの赤い魔獣の巨大な人差し指がリーシャの脇腹を貫いた。家屋に突っ込んだリーシャはピクリとも動かず、青い魔獣が糸が切れた人形のように力無く氣を失つリーシャの体を掴み上げた。

「兄者～女だ～女はあ～焼いて喰うと頬つぺた落ちちゃうんだよね～」

「お～お～俺達は一応草食なんだぜ～！～肉を喰うなんてナンセンス！」

「じゃあ～食べちゃダメ？」

「いや、せつかくの食材だ。焼いて野菜で包んで食べよつきつといぜ兄弟～！」

その一部始終を見ていた慶。

早く助けなければリーシャは確実に死んでしまうだろう。
しかし、助けに出たいのは山々だが自分は余りにも無力だ。

しげみに身を潜める慶の頭には次々に言い訳の言葉が浮かんでは消えていく。

（出でいつも意味がない。無駄死にするだけ、オレには目的があるんだ、こんなとこでは死ねない）

己の命を賭しても人を救う事こそ、眞の人への第一歩。祖父伝來の信念であり、幼少の神谷慶の目標であった。

「ごめん・・七雄」

決断を下した慶の心は冷静だった。

何かを棄てる覚悟は何かを保つことより軽いと人は言つが、死ぬかもしれないこの状況で、生き返る希望を棄ててまで人を救おうする慶の覚悟は、保つ事より、遙に重い。

青い魔獣が燃え上がる家屋にリーシャを投げ込もうとした時、慶はリーシャの手から落ちていたSGを拾い、そして、その手の平にローンを集束していた。

集まつたローンはピンポン玉程の大きさ。リーシャやオーシャンに見せてもらつた物より遙劣るがかわりに祖父伝來の信念を込めた。

「いつぐそ」

魔獣が振りかぶつて投げ込んだのはリーシャではなく自分の右手だった。

自分に起こうとした事態にパニックになつた魔獣が発見したのは、肩で息をしながらリーシャを左腕で抱え、右腕には僅かに発動したSGを持った慶の姿だった。

卷之二

興奮して振り下ろされまくる魔獣の巨大な拳の爆風と土埃に、逃げるでもなくリーシャを安全な場所に隠した慶は再び魔獣の元に現れた。

すでにSGは発動すらしていない。

「コロスコロスコロスコロス」魔獸が残った左手に持った斧を目に見えないスピードで振り下ろした。

あまりの気迫に体がすくみ、尻餅をついていなければ確実に死んでいただろ？その斬撃は、空振りしても数メートル先の壁に爪痕を残す威力だ。

この一振りで慶は自分の考えが心底甘かつたと痛感した。

SGの発動と自らの武道家に育てられたという経験がこんな状況でも慶の心におごりを生み、先程の逃げるチャンスを棒に振ったのだ。

咄嗟にSGを発動し距離をとつた慶に第一撃が襲い掛かる。

まさに危機一髪。

どつにか斧と自分の間にSGを挟み、防ぐことができたが数トンに匹敵する威力を持つ斬撃に慶の体は吹き飛び、血が道のよひに一直線に飛び散っている。

（にげ、な・・きや、）

僅かに残った意識の中、慶はボロボロの体を引きずり逃げ出した。

5、6歩進んだところで風切り音と共に斧が慶の左肩を切り裂いた。
「ぐああああああああああああ！」
あお向けに倒れたもはや虫の息の慶にとどめを刺そつと魔獣がその腕を振り上げた瞬間。

（あれ・・？）

気がつくとあのクリーム色の部屋にいた。

第7話・ウールヴヘンジの鍵

「あれ？ オレなんで此処に？」

クリーム色の部屋、中央にはプフがティーカップでお茶を飲みながら英字の新聞を呼んでいる。

「プフ・・せん、オレもしかして又死んだの・・？」

今まさに魔獣の一撃が振り下ろされそつとする瞬間。
それが慶の一一番新しい記憶。

「おや、これは神谷慶さま。気付きませんで失礼しました」

新聞を折りたたみ、残ったお茶を一気飲みするとプフの姿はスッと消え慶の横に現れた。

「あなたは死んだ訳ではない。言つたでしょその鍵を使う時が来たら教えると」

プフが指差すは一本の鍵のうち狼の紋様が入った方。

「その鍵の名前はウールヴヘンジの鍵。気高き闘将の鍵。それを使えば一時的に莫大な戦闘力を得ることができます」

「ウールヴヘンジの鍵・・」

最初は氣にもしなかつたがよくよく見れば不思議雰囲気を持つ鍵だ。まるで生きているような独特の氣配を放ち、狼の紋様は今にも動きだしそうな息遣いすら聞こえてくるよつた、そんな氣さくする。

「つーかどうやって使うんですかこの鍵」

「使い方はいたって簡単。ここに鍵穴に差し込んで回すだけ」 そう言つてローゼンは慶の左胸、丁度心臓の辺りを突いた。

「こんなとこに鍵穴なんてあるわけないじゃ・・ん！？」

瞬間、慶は又いつのまにか現れたDestiny Gateに飲み込まれるように吸い込まれて行った。

気付くと元のシーンへと戻っていた。魔獣が斧を振り上げ、にやけながら自分を殺そうとする瞬間に、

「死へね」

振り下ろされた斧。

恐らく何の手加減もなく振り下ろされたであろうその斧は村全体に響き渡るような爆音を立てて慶を真つ一つにしたように見えた。

「あ～れ？」

手応えの違和感に手元を確認するも慶の体はなく、たださつべつと地面がえぐられているだけ。

「どうやつ・・て使うんだっけ・・？」

フラつきながら数メートル先で立つ慶を魔獸の眼が捉らえた。譴言をぶつぶつと喋り始めたその姿は誰の眼から見ても危険な状態だったが、人によつてはそれを予兆だととらえる人もいる。

怪物の目覚めの予兆。

「ブツツブシ～～！」

飛び掛かる魔獸。

「そうだ、こうするんだ・・」カシャン、と音がした。鍵を開ける音。鍵は本来、何かを閉まつたりする物。だが物によつては何かを封印する為に使われる。危険な何かを。

魔獸の眼に映つた最後の光景は辺りを突如覆つた白い霧と鬼の姿。青の魔獸の魂はその余りにも抽象的なイメージを最後にこの世界を旅だつた。

瞬殺。

魔獸の体は全て細切れとなり原形を留めない緑の血が滴るだけのだの肉片へかわつた。

「兄弟・・」

赤い魔獸が立ち上がつた。怒りに震えた拳を振り上げ、地面を一打し立て掛け置いた布に包まれたSGを取り出した。慶のとは違い青のボディに白いスプライトが入つた斧のSG。

「下等なただの食料がオレの弟に何しやがつた！～！」

かなりの怒氣を発する赤い魔獸だが鍵を開けると共に慶から吹き出した白い霧のようなものが視界を塞いでいる。

不思議な霧が村全体に充满し、先程まで荒々しく燃えがつていた火が見る見る弱くなり、やがて鎮火した。

「出てきやがれ！！」霧を払うようにSGを振り回すも霧は離れるどころかまとわり付くように魔獣の回りを覆いつくす。

「卑怯だぞ、貴様！出てきて正々堂々オレと闘え！！」

「オマエにそんな事言われる覚えはねえが、やつてやるよ」耳元でそう呟いたかれ、咄嗟にSGを振り回した魔獣だが既に慶の姿はなかつた。

満月が照らす中辺りを覆う霧が一点に集束し始め、やがて一つのルーンとして慶の右手へと形を成した。

黄緑ではなく完全な白のルーン。それを集束した慶自身のあれだけ酷かつた体の傷も消え、髪には白いラインが入つてい。

慶のルーンにより構成されたSGは純白の刃をしていた。
しかしそれには白が持つ清潔感や神聖性はなく、代わりに思わず身震いするような極寒の殺氣が満ちていた。

「う、ウールヴヘンジ・・・！」

慶の姿を見て魔獣の頭に1番最初に浮かんだのは、まだ自分がただの牛だった時の記憶。

牧場主の娘が持っていた絵本に書かれた古代の魔神ウールヴヘンジの姿が慶と重なる。

「何だ、この感覚は・・・」

何もされてないのに魔獣は尻餅をついた。

心臓の鼓動が速くなり、汗が滲み出でてくる。

「そうだ、思いだした。この感覚は、」

弟の死から間もなく兄も死んだ。

恐怖
・
・

第8話・はじめの一歩

あれからすくに気絶してしまった慶が眼を覚ますと全てが白い、プロのいるあの空間とはまた別の空間にいた。

起き上がり辺りを見渡すと黒い箱のよつた物が見えたので近づいてみるとそれは小さめの冷蔵庫であった。

「冷蔵庫・・？」

開けてみるとカップ型のアイスクリームが一つ置いてあるだけ。

「・・？」

アイスに手を延ばそうとした時背後にただならぬ気配を感じて振り返ると一人の少年がいた。

「お兄さん、それボクのアイスなんですけど」

「あ、『メン』

慶はその顔に見覚えがあった。Destiny Gateから顔を覗かせていた少年にそっくりなのである。

「君じつかで会わなかつたか？」

「ボクとアナタは初対面。ところでお兄さん名前は何て言ひの？」

「神谷慶だけど」

それを聞くと少年は驚いた顔で慶の顔を眺め始めた。

「ボクの家に誰が迷い込んで来たのかと思つたらお兄さんが神谷慶だつたのか~思つたよりイケメンじゃん

「おまえ、オレのこと知つてんのか？」

「知つてゐよ伝言頼まれてゐる」少年はおもむろに一枚のメモ用紙を取り出した。

「初めまして、そしてよつとこの世界へ神谷慶君。君がこの世界に来ただいたいの理由はローゼンに聞いてるよ」

「ローゼン？」

慶は自分の運命を歪めた老人の名前をここで初めて知ることになる。「あの爺さんローゼンって言うのか」

「続けるよ？君の前にはこれから様々な試練が立ちはだかるだらうけど、君の願いを叶えるためにはそれらを乗り越えなければならぬ。逃げては何も手に入らない。健闘を・・祈る。」

少年は読み終わると一瞬で消えた。

「おい！何処いったんだよ！？」

空間に声が響き渡る。

「あとP・Sヒントを一つプレゼントしそう。君が探す扉には鍵と同じ雌雄同体の紋様が入ってる。あと、せっかく来たんだからこの世界も楽しんでつってさ、以上がノア様からの伝言でした～読み手はウラだよ！またね～」

朝日で目が覚めると教会のベットの上だった。

「あ、目が覚めた？」

目が覚めて初めて視界に入ったのは傷だらけのリーシャの姿。それを見てフラッシュバックする昨日の光景。手に僅かに残る魔獣の血。

急に自分の力が恐くなつた。

リーシャを助ける為、村を守る為、沢山の大義名分のために刃を振るつたつもりだったが、あの魔獸は人の言葉を話、理解していた。結果。姿形は獸でも、慶の心には人を殺してしまつたような罪悪感が残つた。

「クソ、アイツ等は死んで当然のはずなのに何でこんなに心が痛いんだ・・！」

「慶君・・」

「そんな事を悩んでいる暇はないぞ」

扉にはいつの間にかオーシャンの姿があつた。

「明日には旅に出てもらひうことになつた」

「そんな急に、慶君はこんなに怪我しているのに」

オーシャンは視線を慶から離すと口を開いた。

「村人達がな慶の力を恐れてるんだよ。村の男共すら子供のように扱つた魔獸をたやすく倒したその力を」

慶はしばらくうつむく

「わかつた」と呟いた。

オーシャンは慶に服を渡すと部屋からでていき、納得がいかないリーシャもオーシャンの後を追つて部屋を出ていつた。

「教主様、慶君を追い出すなんて納得できません。慶君はこの村を救つてくれた恩人ですよ」

「仕方ないことなのだリーシャよ。人とは姿形が違つたり、過ぎた力を持つ者等わずかな違いにによるさい生き物なのだ。このまま慶を村に留めてもいいことはないだろ?」

「なら・・・」

リーシャは両手を強く握りしめながら真剣な目でオーシャンを見た。何かを決意した眼で

「私も慶君と一緒に行きます。色々役に立つはずだし

「何を言つているんだリーシャー・?」

「私が村を代表して慶君に着いていきます!」

リーシャの眼をみたオーシャンはハアと一つため息をついた。(普段はいい子なのに妙なとこ頑固だからな)

オーシャンを見つめ続けるリーシャ。

「わかったよ・・・」

「ありがとうございます教主様!」

オーシャンの許しを貰つたリーシャは準備をするため自分の部屋に入つていつた。

「リーシャが旅か、」

オーシャンは昔を思い出していた。

リーシャには両親がいない。

17年前魔獣に襲われた商隊の唯一の生き残りがリーシャであり、オーシャンに保護されてからは孫のように育ててきた。

次の日、早朝。

「ん～～」

昇りかけの朝日に向かって気持ちよさそうに伸びをするリーシャ。

後にはまだ元気のない慶の姿がある。

「なにを落ち込んでいる。慶よオマハの行いは正しかったのだ。この世界で旅をしたいならあの程度のことは沢山ある。夢を叶えたいなら心を強くもて」

「オーシャン・・・ああ、わかつたよ」

少し立ち直った慶の手をとり握手をした。

「リーシャを、頼んだぞ。それからこんな物騒な世界だがいいところもある。旅を楽しんでこい」

「わかつた」

朝日に照らされ、見送りは一人しかいなかつたが慶にはそれで充分だつた。自分を応援してくれる人がいる。一緒に旅をしてくれる人がいる。それが単純にうれしかつた。

慶は村の出入口で一度立ち止まると力強く一步踏み出した。

「はじめの一歩だ」

今、慶の旅はこれから出会うであろう様々な人や物、世界を巻き込んでその一歩を歩み始めた。

「おれ、このまま死ぬのかな」

1メートル先も見えない極寒の吹雪の中に慶の体はあった。

その体は雪に埋まり、意識はもつり、自分の体から生気が抜けていくのがわかる極限の状態。

今にも三途の川も通行してしまつような死の一歩手前に慶の意識はあつた。

そもそも何故このようになったかといつと時間はかれこれ二時間程前に戻る。

慶とリーシャはオーシャンの薦めでここいら辺で一番栄えているアリアに向かう為ジス村から飛行船に乗船。これが慶にとつて不幸の始まりであった。

無事離陸しリーシャと共に眼下に広がる天険アイスナルキス山脈の雄大な大自然を見下ろしている時、慶の耳に不意に

「バキッ」という何とも不幸な音が聞こえたかったと思うとそのまま飛行船から一直線。

結果今の状況にいたる。

「眠い・・でも寝たら」

風前の灯火のような精神を奮い立たせようとするが人としての命の

コノリットはもうすぐ近くまで迫ってきていた。

「ラーメン、牛丼、ハンバーグ、せめて死ぬ前に一つくらい喰つておきたかったぜ……ん？」

死に際に食べ物しか想像しないめでたい慶の視界のハジにふと、なにやら黒いものが映つたかと思い、振り向くと何か向こうの方に黒いものが立っているのが見えた。

「なんだアレ？」

よく見よつと田をこすりもう一度見る。

「アレ？」その黒いものは更に大きくなつている。

「アツレ～？」

再度田をこすり見てみると田の前にその黒いものは立っていた全長2メートルは超えるだらうそれの顔部分に徐々に田をやる慶。

「ぎ、ぎやああああああああ！」

田を怪しく光らせる黒いものの顔を見て慶は絶叫の後、パタンと呆きなく氣絶してしまつた。

第10話・ジャス&グリン

外は変わらず猛吹雪。

白く冷たい悪魔が山々を覆っている。

慶はとある山小屋のベッドの上でスースーと寝息を立てて寝ている。暖炉があり、外と違つて暖かさに溢れた空間。

「ん、ん~?」

やつと慶が目を覚まし起き上ると、暖炉に一人の老人が木をくべている。

「やつと起きたか」

慶が起きたことに気づいた老人は手をはたくと近くの椅子に腰を下ろした。

「じいさんがオレを助けてくれたのか?」

「違つ」

老人は立てかけておいた獣銃型のSGをとるとメンテナンスを始めた。長年使い込まれた感がする黒いSGだ。

「じゃあ、誰が・・え?」

その時、部屋のドアを開ける者がいた。慶の視界に初めてに入ったのは温かそうなスープ。そして次に入ったのは一足歩行する黒毛の巨犬な熊。

「うわああああああー? コイツはせつきの

「そいつがお前を助けた恩人だ」

「ガウ」

驚き後ずさりする慶を気にするわけでもなく熊はスープをベッド横の机に置いた。「命の恩人を怖がるとは失礼なやつだな」

熊は専用に造られたような巨大な椅子に座るとジッと慶のことを見ている。

「この熊が？ホントかよじいさん」

「熊じゃないグリンだ。ついでにワシもじいさんじやなくてジャスだ覚えとけ」

机に置いてあるスープを手元に寄せ、一口する。

「うめえ・・・」

見た目はただの「コーンスープにしか見えないが二ソニク等の食材がバランスよく配合されたプロの味だ。

「それを作ったのもワシじやなくてグリンだ」

「すげえ熊だな。何もんだよいつたい」

「グリンは少しルーンにあてられているんだ。知能が上がり人語も理解するし料理だつてする。安心しろ人は襲わん」

「ルーンに当たられるつて？」

「オマエ旅人の癖にそんなこともしらないのか！？」

ルーンとは前述のとおり万物に宿るエネルギー体であり、万物はル

ーン無しには体を維持することすら出来ない。しかしルーンには違う側面もある。

生物は生きているだけでルーンを消費する。

現在、この世界には大量のルーンが溢れている状況にあり、その主な原因としては自然破壊によるルーン消費量の低下が上げられる。消費されずに残ったルーンは地下で液体になり臨界まで溜まると地上へと噴出、これに生物や物質が遭遇した場合あまりの高エネルギーに急激進化。

これに耐えきれず精神に以上をきたした生物を魔物や魔獣と呼ぶのだ。

「へ~」

関心片手にスープをかつ食べりつ。

「こんな常識子供でも知つとるだ」

ジャスは呆れ顔でSGのメンテナンスを続けていた。狙いをつけ、何度もサイトの微調整をおこない入念に各所をチェックするその真剣な顔立ちは迫力に満ちている。

「ガウ」

しばらくしてグリンが時計を指差した。

「おお、もうこんな時間か」

よつじゅせと老体を上げるとジャスは何かの準備を始めた。

「オマエはここにいるよボウズ」

「どこか行くのか？」

「狩人が外出する理由なんて決まつたるだろ」
獵銃のSGを軽く持ち上げる。

「狩りの時間だ」

「それならオレも連れてってくれ、助けてもらつた例になんか手伝
うぜ？」

「何言つとるかボウズ。素人がプロの仕事に首突つ込むとえらい目
見るぞやめておけ」

「オレも・・あれ？」

急に慶の足がストンと崩れ落ちた。

「ほら見ろ、まだダメージがのこつているんだ雪山を舐めるなボウ
ズが。ここで留守番だ」

慶はしづしづ引き下がり、ジャスとグリンは視界最悪の猛吹雪の中
へと消えていった。

第1-1話・勝手にしり

一時間ほど小屋で休んでいるがジャスとグリンはいまだに帰つてこなかつた。

慶が少し心配して窓から外を覗くも見えるのは雪ばかり。吹雪は止まるところを知らぬ勢いで吹き荒ぶ。

「吹雪、か・・」

狩人がどんな仕事かは知らない。が、こんな吹雪の中狩りに行くことなんであるのか？等と考へる慶。

ふと見つけた古ぼけたジャスの日記。

普通は少しごらい躊躇するところを慶は何も考へずにその表紙を開き読み始めた。

最後に書かれたのは一十年前の春先らしい。

47

それからさらに一眠り。

目が覚めたのは扉をぶち破るかと思つほど力強く叩く音が聞こえたからだつた。

眠氣眼で扉を開けると、一瞬で眠氣は吹き飛んだ。

「ガ、・・ウ、・・」

ルーンにあてられ、少し縁がかつた血を垂らしたグリンと、その背中に背負われた体中傷だらけ、息を荒くしたジャスの姿が飛び込んできたのだ。

「ど、どひしたんだよじこさんー？」

中まで入るどグリンは床に倒れ込み、ジャスはボロボロの体を引きずり椅子に座るとすぐさま傷の応急手当てを始めた。

傷口に消毒液をぶっかけ荒々しく包帯を巻くと、フワフワの体でジャスとグリンは再び吹雪の山に行こうとする。

「ちょっと待てよーそんな怪我してんのに行っちゃか?ー」

「当たり前だ・・」

ジャスの虚ろな目つきで元気も無く、肩で呼吸するほど苦しそうに息をする様子は、次こそは命が危ないであろう事を予感させるほんの一瞬だった。

「待てよ、そこまでしなくちゃならなに仕事じゃないだろ、もう休めよじこさん」

「ガキは黙つてろーー！」

ジャスの一括に、吹雪の音をえ静まり返ったよつた氣をえした。

「じいさん・・?」

「・・・行ぐぞ、グリン」

その様子を見ると慶はおもむろにコートを着込み、こんな吹雪の中外出しても最低死なないような格好をし始める。

「小僧、ついてくる気か？」

「当たり前だ、今度はオレも行く。こんな風に知り合いに死なれたんじゃ、あの時止めとけばよかつた。みたいな後悔しちゃいそうでやなんだよね」

ルーンを意識的に傷口に集中させ傷を癒やすグリンを軽く小突くとジヤスは扉を出たといひで小さく呟いた。

「ふん、勝手にじり・・・」

吹雪の中を三つの影が歩いて行く。

「ああ～み～」

黒く曇つた厚い空からは加減知らずに雪が降り続く。

ジャスとグリンがここで獲物を待つと言い始めて一時間が立つ。
「わざわざ来なくたつていいんだ。寒いなら早いとこ帰るんだな」

と、憎まれ口を呪きながらスコープに田を当て、何かを探すようにな
態勢を崩すことなく獲物を待ち続けるジャス。
グリンは未だ癒えない傷の治療に専念しているようだ。

ジャスの体からも血がポタポタと垂れていたが、これくらい平氣だ
と言つて拭こうともしない。

血が、白い雪を染めていった。その真つ赤な血からはジャスが秘め
た決意とか覚悟といった断固たるものを見るきがした。

「今狙つてる獲物つて何なんだよ？アンタがそんな重傷を負つても
なお追いかけ続ける獲物つていつたい・・」

「オマエには関係ないことだ」

「ベアヘッド・・」

慶が発した言葉にジャスは始めるスコープから田を離して慶を見た。
「なんでその名を知つている・・・?まさか、オマエあの田記をみ
たのか」

頷く慶にジャスは深く静かな怒りを露わにした。

白の世界でもその顔は赤色に染まつてゐる事がハツキリとわかつた。しかし、ジャスはその怒りを爆発させる事は無く、静かに飲み込むとまたスコープに田を当てて獲物を探し始めた。

慶が読んだ日記の内容それは今から20年程前に遡る。

アイスナキス山脈のふもとに若かりし日のジャスはいた。若いといつも年の頃はすでに30を超えた青年から中年へ変わるくらいの時だ。

「早く来いジャスーちゃんたらしくて」と置いてくばれ

「ちよつ、待つてやれこよ」

この頃のジャスは街の暮らしに嫌気がさし、一念発起して狩人になつたばかりペーペーの新米でまだ満足に雪山も歩けないような状態だった。

「はやいですよ、ダイさん」

「その歳で狩人になりたいなんていつてる甘ちゃんに狩人の厳しさを一から教えてやつてるんだから文句垂れずについて来い！」

しばらく歩くとダイはそつと手を上げてジャスに合図を送つた。それを見てジャスは立ち止まるとそつと身を雪の中に潜めた。

「ダイさん、なんかいんですか？」

じつじりと匍匐前進して獵銃型のSGを構えるダイに近づく。

「ああ、白モキッネがいる」

「白モキッネなんて久しぶりの大物じゃないですかー・肉は皿にし、毛は高い。今日は」駆走ですね」

「集中できんからちょっと黙つてろー。」

ダイは獲物に気づかれないよう身を潜めながらじっとチャンスをうかがつてゐる。

しばらくの沈黙。

他人ごとのにやたら心臓の音がテカく聞こえる。

(「うちがドキドキしちまつよ）

何も音のない世界で生睡を一つ飲み込む音がしたかと思つと銃声が響き渡つた。

弾は空氣を裂きながら獲物に近づき、着弾の寸前でバツとルーンの網に変わると傷つけことなく獲物を見事に捕らえた。

「よし、」

ダイと小屋に帰る途中ジャスはハヽとため息をついた。

「どうしたため息なんかついて」

「今日も何も狩れなかつたし、オレもダイさんみたいにクマとか狩りたいなと思いまして」

白モキッネを抱えるダイとは違つて一年も修行しているのにジャスは今日一日獲物を捕ることができずになつた。

それどころか今までまともに獲物を捕つたことすらない。

そんな自分が不甲斐なくて出たため息だつた。

「クマを狩りたいなんて一年くらい修行したからつて一人前になつたつもりか。狩人つてのは根氣のいる仕事だ。そんなことでいちいち折れてるならサッサと街に帰つた方がいいぞ」

「ダイさん、」

それから少しして春がそこまで来ている頃、ジャスは一人で狩りに出ていた。

静かに歩き、気配を消し、自然と一つになる。

人間がいることを山の動物に知られてはならない。

そうしてジャスは獲物を見つけた。

開けた谷間で回りに視界を遮る物が無い絶好の狩猟ポイント。すぐさまSGを構えるジャスだがスコープから見た獲物を見て落胆した。

せつかく初の大物だつた思つた獲物である頬白グマは親子連れだつたのだ。

「クソ、なんでこんな季節に子供連れなんだよ！」

普通、頬白グマの繁殖期は春から夏で今の季節に子供がいること自体が珍しいのだ。

スコープから頬白グマの親子を見つめながら必死にジャスは考えていた。

狩人の撃によりいかなる場合に置いても親子連れは狩つてはならない。

それが山に生き、生かされる狩人の撃である。

しかしこの時のジャスには、日先の獲物に目がくらみ一生後悔する選択をすることとなる。

パンツ パンツ

と一回銃声がした。

少し危ない笑顔を浮かべながら谷間を駆け下りるジャス。
今まさに自分が仕留めた獲物の前に立つと苦しげに息をする獲物と
訳も分からずいきなり倒れた親にしがみつく小熊。

トドメ。

を刺そうとした時だ。

不吉に揺れ始める大地。地面が裂け、自分と獲物の間に巨大な地割れを作ると、次に地割れの中から現れたのは途方もない量のルーンだつた。

「う、うわっ、うわああああ！」

ルーンを浴びるまいと必死に逃げるジャス。

ある程度おさまった後、ジャスが戻つてみると、きっと我が子の為に死力を尽くしたのだろう親グマが子グマを守るように覆い被さり死んでいた。

子グマは辛うじて生きていたがルーンを僅かに感染し、急激な進化に体はボロボロ。

無惨な光景だつた。

「オレのせいだ・・オレが欲にかられて撃たなければこの親子は助

かつたの・・・

ジャスはその場に膝をつくと、もつ生きていない親グマに向かって何回も土下座した。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい・・・・・

ジャスはせめてもの報いに親グマの墓を作ると、一匹残った子グマを連れて自らの小屋へと帰った。

それから数年後

子グマは傷が治ったあと山に帰し、ジャスはまだ狩人を続けていた。

その頃から妙な事が起きるよつになつた。

純白の毛を持つ魔獸に村が襲われるよつになり、討伐に乗り出した狩人も返り討ちにされた。ジャスの師匠であるダイも殺され。次はオレの番だとジャスが準備をしていると一匹の類白グマが現れたのだ。

「オマエ、あの時の・・・

それは紛れもなくあの子グマであつた。

類白グマはジャスについて来いと言わんばかりの態度をとるとジャスをかつて親グマを殺した忌まわしき谷間へと導き、墓を見せた。

「掘り返されてる、」

墓は掘り返され、中に死体はなかつた。変わりにあつたのは生え落ちた黒い毛と、新たに生えた時落ちたであろう純白の白い毛。

言われずとも、全てがわかつた。

今、村々を襲つてゐる魔獸の正体。それはあの時死んだと思われていた親グマ。

ルーンの力で魔獸へと進化した親グマだ。

頬白グマは地面に汚い字で文字を書き始めた。

討伐を手伝つてやる。と

「だがあれはオマエの親だぞ！？」

関係ない。あればもうただの魔獸。人にも獸にも山にも脅威でしかない。

「だが、オマエの親をあんな風にしちましたのはオレだ。」

自然界では死なんてものはいつも隣にいるもの。どこで誰に殺されよつと相手を怨んではいけない相手も生きる為にやつているのだから。

頬白グマの目は真剣だった。

「わかつた、元はといえば全てオレの責任。ヤツはオレが狩る。」

この頬白グマはグリンと名付けられる。

後にベアヘッドと名付けられた親グマは驚異的な生命力、回復力に

加え、圧倒的な殺傷能力により長い年月がたつた今でも生き続けている。

その過程で村は無くなり、狩人もジャス以外全て殺された。

第13話・私ヲ殺せ。

「来た・・」

ジャスの一言に辺りに緊張が走る。

匍匐前進で少し頭を出すと100メートル程先を歩く白いものが慶にも見えた。

これだけ視界が悪いにもかかわらず、その体が発する純白の光は雪の白さを凌駕し、その体はただ白くあった。

昼間に西の山でベアヘッド見たといつゝとは、次は必ず南の山に現れる。
長年の経験からそれが分かつていたからジャスは辛抱強く待ち続けたのだ。

自然、体に力が入る。あの日から既に20年近くたち、今までたつた3人で繰り返してきた殺し合いだが、この瞬間に馴れる事はない。

「いいか、ワジが撃つたらそく逃げるんだ。いいな」

「なんで、だよ?」

「死ぬからだよ」

「死ぬつてそいつで撃てば終わりなんじゃないのかよ?」

「ヤツの生命力は既に生物の規格を超えてある。体に弾丸を撃ち込まれた位では死なん。ヤツを仕留めるには体のどこかにあるルーンの結晶を破壊しなければならないが、当たるかどうかわからぬ」
ジャスの指がトリガーオーにかかる。

「故に撃つたら逃げるんだ。もしヤツのルーン結晶を破壊できてなければ、次はコッチがやられる」

「だからさつきあんな怪我して帰ってきたのか」

「20年間何度も繰り返しても当たった試しがないからな。逃げる準備だけしどけ」

ジャスはスコープを覗き込み、静かに敵を捉えた。

今まで頭や腹、心臓に銃弾をぶち込んでも死ぬことはなかった化け物を殺すべく狙いがつけられた。

「これを見舞つて、死ななかつたらむづ、お手上げだな」

自分で自分に皮肉を言つとUFGの弾を全て捨て、赤いテンジャーマークの入った弾を取り出す。

甲式狙撃散弾

見た目は通常弾と同じだが高密度のルーンを内包し、目標1メートル前でルーンを放出。

外装を破壊、拡散した破片にルーンが取り付き直径3センチの散弾になるというなんとも恐ろしい弾丸である。

ジャスは弾を込めると再びベアヘッドに狙いをつける。

グリンはジャスを包み込むように支え、銃の安定性を上げる。

風の音に消え入りそうな乾いた破裂音が山に小さく呪玉した。

破裂音に振り向いたベアヘッドの体を無数の散弾が襲う。肉をえぐり、千切り、吹き飛ばされ、体からルーンに汚染された黄緑色の血を吹き出すが、その巨大が雪原の白い絨毯に倒れることはなかつた。

「逃げる！…！」

ジャスの声に振り向き走り始めた慶だが、時は既に遅かつた。ベアヘッドは再生の為にのた打つ体をものともせずに跳ね上ると3人の前へと降り立つた。

「クソッ・・！腹括れ小僧！」

威圧感に立ちすくむ慶の横をグリンが風を切りながら通過するとベアヘッドと直接組み合う。

「そのままおさえとけよ！」

ジャスは手早く弾を入れ替えると、均衡する両者へと銃口を向け発射。ベアヘッドの脇腹に命中するもそれをものともしない。

素早く次弾を装填するジャス。再びスコープを覗き込んだ時、グリンの巨体が投げ飛ばされる姿を見てとつさに回避したが、グリン諸共新雪を巻き上げて雪に埋もれてしまった。

「じいさん！」

一瞬、人の心配をした慶だが、すぐに自分の置かれた状況の危険さに気がつく。

ゴクッと生睡を飲み込む慶。

自分が出会った中でも最大級の獣と田^だが合い続けるという、最大級のピンチに体は動くことができなかつた。

硬直したかのように動かず、頭の中は様々な危機回避パターンを提案するも、唐突に出会ったその危機的状況に答えを出せずにいる。

（ビリするビリするビリするビリするビリするよ・・！？）

と、思考する慶をよそにベアヘッドのカギ爪はゆっくり振り上がり、高速で振り下ろされる。

不意に訪れた一撃だが田^だを合わせていた分反応できた。

そこからは今までの静寂が嘘だったかのような戦闘が始まる。

高速で何往復もする爪に体に似合わない軽快なフットワークで次々に攻撃を繰り出す。

「つおおおおー！」

負けじとSGを発動する。

戦闘に集中していて慶は気づいてないが、発動したSGは初めて発動した時のようなナイフ程度の物ではなく、しつかりと剣と呼べるだけの刃を備えた物へとなつていた。

爪と剣が重くぶつかり合う音が何度も児玉する。

均衡した実力にお互いに決め手を欠いている状況に思われた時、不意に、戦いの中ベアヘッドが笑つた様に見えた。

不気味な感じに慶が一步引いた途端ベアヘッドは腕をしならせ爪で思い切り降り積もった雪を巻き上げる。

「クソツ、前が見えねえ」

降り続ける雪に巻き上げられた雪が合わさって何も見えない田くらましを喰らつた慶が再び視界を確保した時そこにベアヘッドの姿はない。

「ど二だ、どこ行きやがつた！？」

辺りを見回すが姿を確認することはできない。

「小僧、下だ！」

咄嗟に右へ跳んだが、雪中からベアヘッドの黒光りする爪が突き出し慶の左足をえぐる。

「痛え・・・、雪の中に隠れるなんて、これが雪上の戦闘か！..」

慶を追撃しようとするベアヘッドだが雪から這い出たジャスが頭を撃ち抜き、右のストレートを紙一重でかわし、懷に潜入したグリンが全力のアッパーをお見舞いする。

「やつたか！？」

グリンの一撃はその爪が顎から頭の天辺を貫通し、首を引っこ抜く程の威力を見せたが慶の目にはさつきのように不気味な笑みを浮かべたように見えた。

次のシーン

グリンが血しづきを上げて吹き飛び、離れていたジャスも突如切り

裂かれたように血を出すとその場に倒れた。

「何故だ・・・カハツ、何故ワシは倒れている?何故ワシは血を出しているのだ!?」

その理由を知つてゐる者はこの場にベアヘッドと、間近でそれを見た慶だけだが、慶は自分がその日で見た事を信じる事が出来なかつた。

「なんだ今のは・・・!?

あの瞬間、ベアヘッドが笑つたように見えた時、両の爪が薄く光つたかと思うとそれを一閃、一閃と振り抜き爪から飛び出た淡い光の刃はジャスとグリンを血に染めたのだ。

「これはルーンの力か?こんな物初めて見るぞ」

弱るジャスはベアヘッドの笑つた顔を見てあることに気づく。

「まさか、今までアイツは本気じやなかつたのか?ワシ達は20年間ベアヘッドに遊ばれてたのか・・・?!

真実にどうしようもない怒りが込み上げ震えるジャス。

この20年間殺し合つてきた相手に手加減されてゐた事実。自分達は殺さなければならぬ筈の、終生の宿敵に生かされていた。

そう考えただけで目の前は怒りに染まつた。

「うあああああー!」

狙いも定めず、叫びながらベアヘッドに突つ込んでいくジャス。

「避けるじいさん!ー!」

極限の怒りが熟練の狩人を盲目にし、自分に迫り来る追撃の一刃を見えなくした。

そうして倒れたジャスを見て次に我を忘れたのは慶だった。

「テメエ、絶対に、殺す・・！」

カシャン

鍵を開ける音と共に慶の体を駆け巡る力の渦は髪に白のメッシュを
入れるとSGに殺しの力を宿らせた。

「うあああらあ！！」

悪い足場にも関わらず、一蹴りでベアヘッドまでの距離を限りなく
ゼロにするとそこから神速の連撃を放つも、咄嗟に慶の危険性を察
知したベアヘッドはそれをルーンの膜のようなもので防ぐと距離を
とる。

その顔はこの殺し合いが始まって初めての真剣な表情をしていた。

「そんな顔できんなら・・何で今まで真剣にやり合わなかつたんだ
よー？」

「ヒマツブシ・・

その一言に再び怒り爆発の慶はさきよりも更に早い速度で距離を
詰め、その剣を振る。

あまりのスピードについてこれなかつたのかベアヘッドは先程に比
べると不自然に動かなかつた。

一閃決まり、二閃決まり、三閃四閃とその体が血で染まるまで斬り
続け、遂にベアヘッドを瀕死に追い込むと、黄緑色をした拳程のル
ーンの結晶が額にメリ出し、倒れたその頭のルーン結晶にSGの刃
先を向ける。

「オレはオマエを殺せない。オマエを殺すのはじこさんとグコンの役目だ」

ジャスを起しそうと振り向いた時、ベアヘッドの口から言葉が漏れた。

「ハヤク私ヲ殺せ。モウジブンノ意識をタモテナイ。もう破壊にイキルノハヤだ。ワタシが暴走しないウチに早く、コロセ。ワタシを・」

「え？」

言葉を疑い、田をベアヘッドにせりひとした瞬間、傷からしたたる血を撒き散らしながら再び襲いくるベアヘッド。

「チイツ、」

慶が腰のUIGを引き抜いた時だった、

パンッ

と、ひとつ銃声がするとベアヘッドのルーン結晶は砕かれ、長く続いた殺し合いは呆気なくその幕を閉じたのだった。

第14話・憧れ、恐れ、敬意

死にたい

その一言だけが、薄れゆく意識の中いつも頭の奥底にあった。

ルーン汚染の結果ベアヘッドと呼ばれるようになった彼女は生きながらに地獄を旅する者だった。

ルーンによる強制進化。

それに伴い押さえきれなくなる破壊衝動。そして魔獣として生き始め、自分が何をしてきたのか、

進化し、良くなつた頭は全てを理解していくが自分を止める術を知らなかつた。

飽くことなく暴れ続ける自分自身に恐怖を抱き、いつか自分を殺してくれるものが現れることをただひたすらに祈り、待ち焦がれた。

そして今、長い月日を経てやつと自分に~~そぞら~~の瞬間が訪れた。

「ハア・・ハア、ハア、ハア、」

息を荒げるジャスはSGを構えたまま動こうとはしなかつたが、やがてグリンに身を任せるように倒れた。

「やつた、か・・」

二人の下に慶が駆け寄つてくる。

「大丈夫か2人とも？」

「ああ、この寒さで血が凍つたおかげで何とかな。元々深い傷でもなかつたようだ」

「そうか、よかつた」

ジャスは傷口を抑えながら立ち上がると覚束無い足取りで倒れるベアヘッドの下に歩み寄つた。

「ベアヘッド・・」

ルーン結晶を破壊され自己治癒能力が無くなつたのか、いつの間にか赤い血を流すベアヘッドは息絶え絶えに何かを喋りつづける。

「アリ、ガト・・ウ」

その言われる覚えのない一言に、むしろ罵られても仕方のないと思っていたジャスの目からは涙が止まらなかつた。

「すまない、全ては、全ての責任はワシにある。すまない。すまなかつたあ、」

20年前のたつた一度の過ちを、自分の愚かさを語り、謝り続けるジャスを見てベアヘッドは少し笑い、グリンに向かつて長く低く唸り声を上げるとベアヘッドはその生涯に幕を下ろしたのだった。

おおよその生命が与えられる幸せを感じる事は出来なかつた。酷く苦しい一生に狂いそうな程嘆いた日もあつた。自らの有り様に何度も死にたくなつた。

でも、それでも私は、この自分自身の生き様を後悔した日はない。
私は気高き類白グマだ。
どんな理不尽な事が起こうと甘んじて受け入れよう。それが自然の摂理であり、真理。

誰かは私を可哀相だと言つかもしれないがそんな事はない。
私は宝を守ることが出来た。子供を殺さずにすんだ。

だが、代わりにたくさんの命を殺した。だから地獄だらうとなんだろうと罰は受ける。それが私の選択だ。

「承知いたしましたベアヘッド・・いや、マーレ様。」

あのクリーム色の空間。

そこには普ふと人化したベアヘッド改め、マーレの姿があつた。

「でも、死後の世界でまさか人になるとは思ひませんでした」

マーレは自分の変貌ぶりにただただ啞然としていた。

「ここは精神の世界。望めばどのよくな姿にでもなれますよ。アナタ様が人の姿をとるのは恐らくは憧れや恐れ、敬意からきたものでしょ?」

「憧れや恐れ、敬意・・・」

その時マーレの脳裏にあったのはいつも息子の横にいたジャスの姿だった。

「息子と一緒にいる彼の事が憧れであり、私の運命を狂わせたのが恐れであり、息子を生かしてくれた事への敬意か・・・」

感慨にふけるマーレ。

「そろそろお時間です」

「わかりました」

マーレはふとどきりとある天井仰ぎ見た。

「元気ですか」とグリン

途端にマーレの姿は木の葉のように黒く大きな扉へと吸い込まれ、扉は重く、すすり泣くような音を出して閉じたのであった。

頬白グマのマーレ

地国世界地獄地区行き決定。

第15話・早く行け！

「おい、いいのかよあのままで？」

「ああ、いいんだよあれで」

僅かに晴れ間が指した先には、何の処理もされていないそのままのベアヘッドの死体が横たわっていた。

ルーンによる再生能力を失い、息絶えた後には戦いで負った生傷から溢れ出した血が、そこだけ赤く染めていた。

「やつぱり墓くらい造つてやうひが」

「つむさい小僧だな。 あのままでいいと言つとるだらうが」

自然に生き、自然に死んだ動物の亡骸に墓はない。

他の生物の餌になり、骨になつても大地に埋もれその糧になる。それが普通なのだ。

ベアヘッドには最後くらい普通の動物としての死を全うして欲しい。とのグリンたつての頼みもある。

「だが狩人つてヤツは殺す為だけに狩りに出る事を固く禁じられた人間だからコイツを貰つてきた」

ジャスは包みから三本の立派な爪を取り出した。

「すげえ…」

黒く、鈍く光るそれは、剣ではないが剣氣迫るといった感じか、ただの爪なのにそれは妙な迫力に包まれていた。

「オマエにも一本やひわ」

触るのもためらひつ剛爪をヒヨイと持ち上げて投げ渡すジャス。投げられた方はビッククリして思わず落としそうになつてしまつ。

「渡すならもつと普通に渡せーーーー！」

「それくらい受け取れハナタレが」

改めて爪を見回す。

「ホントに貰つていいのかよオレなんかが

「いいんだよ。曲がりなりにもオマエのお陰なんだからな、それにあんなおつかないヤツだったが少しでもホントのヤツを知ってるヤツに貰つてもらいたいからな」

困り顔でグリンを見るとガウと一回吠えられた。

それが慶には貰つてほしこと書つてゐるよつて聞こえた。

強敵であった。

その身体能力は勿論の事、特筆すべき再生能力にカマイタチの様な物を発生させる技。

どれもが神谷慶にとつては驚異だつたがそのどれもを弾き返す神谷慶自身の能力。

神谷慶がこの世界に来てから演じた命をかけた戦いは僅か数日間で二回。

これが元の世界の生活ではどれほど有り得ない事か、そしてその二回を両方とも生き抜いた事によつて神谷慶が得た経験値がどれほどの物か自分自身でもわかつていないうだ。

今後もその足取りを追い、隨時まとめて行きたいと思つ。

著クライン・アルバーノン

「クライン、また神谷慶を見ていたのか？」

椅子に座り、レポートを書く青い髪のクラインと呼ばれる男。声をかけたのは赤い髪をした中学生くらいの少年。

「ああ、ホッパー。いや、彼は実際に面白い男ですよ。ローゼンが資格を与えたのも頷ける」

ふーんと興味なさげにホッパーはどこからか椅子を持ち出し、クラインの近くに座つた。

「クラインがそんな風にしてんの久々に見たよ。その、神谷慶とか

「いつのそんなんに面白い?」

「はい、非常に興味深く、人間の醜い馴れ合いの部分がよく出でいます。そう、とても、ね」

クライインはガツと立ち上がると天井を仰ぐよつにして眼を瞑る。
「ああ、人間とはどうしてこんなにも愚かしく、醜いのか、馴れ合いを好み、使えない者を切り捨てるのを良しとしないその考え方! まったく……」

クライインの掲げる手からナイフが飛び出すとレポートに書かれた顔写真に突き刺さった。

「殺したくなつてしまつ……」

「ヒュー、クライイン」「ワーライ

山小屋

「もう行くか」

「うん、色々世話になつた。ありがとう。」

「まあ気にすんな。こつちも世話になつたしな」

「それから……これ大事にするぜ」

慶は腰に下がられた爪の飾りを触りながら礼をいった。

「これから旅気をつけるんだぞ。その、なんだ、諦めたら諦めた

でオレの弟子になつても構わんがな

照れながらのジャスを見て一番笑つてたのはグリン。何が可笑しいか！？と赤らめながら怒鳴るジャスを見て慶も笑らつてしまつた。

「もう早く行け！」

ドンと背中を押されて慶は走り始めた。

「また来るからな～！…ん？」

大きく手を振るジャスとグリンの横にベアヘッドが見えた気がしたが、

「氣のせいだらうー」

世界有数の大山脈天険アイスナルキスを後にし、慶は一路アリアに向かう。

第1-5話・早く行け！（後書き）

いきなりリーシャの出番が無くなり失敗したと想っています。

「ホントに心配したんだからねー。」

「すんませんーーー。」

潤んだ眼をしたリーシャに慶は鹿威しのよつにただただ頭を下げ続けていた。

ここはアリアとアイスナルキス山脈の丁度中間点にある街、クレージュタウン。

慶が飛行船から落ちた後、折れてなくなつている手摺りを見てすぐさま状況を読み込んだリーシャは、パニクつたまま飛行船を止めようと機関室に侵入したりそのまま飛び降りようとしたり、ついには補給地点であるこの街で強制下船。

アイスナルキス山脈に単身乗り込もうとした時、下山して来た慶に偶然出会わなければ、ケータイもなこの世界。

一生会つこともなかつたかもしぬない。

「まあ機嫌なおしてや、街見物と行こうぜ」

「知らない！慶一人で行けば！？人がこんなに心配してたのに私の苦労を聞いて笑うなんてヒドイ！」

機関室で大騒ぎに加え、強制途中下船なんて聞いた日には腹筋がよじ切れる程笑つた事を若干後悔していた慶。

「さ～よつてらつしゃい見てらつしゃい一世にも珍しい喋るネコだよ～」

妙な呼び込みにいまだ腹を立ててゐるリーシャを連れて見に行つて見ると、一匹の黒猫が鳥籠に入れられ怯えた表情で周りに群がる人々を威嚇している。

「さあこの黒猫、ただのネコじゃない！なんと魔物でもないのに人の言葉を喋るんだ！」

「ホントなのかよ～！？」

誰が言つたかわからないヤジにネコの持ち主の商人は待つてましたと言わんばかりのニヤケ顔で籠に手を突つ込むと、嫌がるネコを捕まえ強制的にその目を見開かせる。

「これが証拠だ。どっちの目も変色していいだろ～？」

それを見ていてリーシャは突然振り向くと慶の袖を引っ張つて群集を抜け、目的もないのに歩きだした。

去り際、そのネコがかすれ声で一言、タスケテと言つたのが妙に頭に残つた。

「どうしたんだよリーシャ？」

質問にリーシャは静かな怒りを込めて答える。

「あれ、獸化病の人だよ」

「獸化病？」

獸化病

ルーンによる病気の一つと考えられているが原因は全く不明。発症すると全身が毛に覆われ、尻尾、耳、顔、体の各部位の順番で次々と獸化し始め、最短2ヶ月で完全な獸になってしまい、それに伴い知能も獸じみてくる大病だ。

「あのネコ、目が変色してオッドアイになつてなかつた。つまり、獸化病でネコになつちゃつた人。それなのにあんな見せ物みたいにして、耐えられないの」

「ならあんな商人ボコッて止めさせればいいじゃん」

「獸化病患者は大概奴隸登録を受けてるから助けても無駄なの。すぐにつけられて持ち主に返されちゃう」

リーシャの赤らんだ頬に、涙ぐんだ目、慶とのケンカでそうなつているのか、さつきのネコでそうなつているのか、

改めて辺りを見渡して見る。

華やかなメインストリートに、それを飾る多種多様な屋台。レンガ造りのオシャレな家が立ち並ぶ賑やかな街だが、所々でホームレスのような人々を見る。

しかも、子供から大人、老人まで分け隔てなく。

しばらく歩いて高い場所から見ると一目瞭然だつた。

繁栄しているのはメインストリートに、それに隣接する数カ所だけ。それ以外は黒く色分けされたような雰囲気に包まれている。

「(イ)も前は大きくなかったのにな…」

移り行く物に思いを馳せ、過ぎ去つた過去を懐かしむ。

そんな慶達の耳にまた妙な物が聞こえてきた。

「大変だ～ウェアウルフの大群が向かつて来てるぞ～！」

その少年は同じ事を何回も叫びながら街中を走り回つていた。

「ウェアウルフ！？」

「どうしたんだよリーシャ？」

「あの子が言つてる事がホントなら大変な事になる…。数によるけどウェアウルフは集団で行動する魔物で、かなり頭がいいから大群に襲われたらかなり危険だわ」

だが、周りの人間達の反応は冷ややかの一言。

チラツと見るのはまだいい方。大多数の人々が街の危機に見もせず、無視。

少年だけがその場で浮いていた。

「なんだここのヤツらは？自分達の街が危険だつて言ひて反応なしかよ」

「うわ～ん」

走り抜けてきた少年は慶に抱きつくと田を潤ませ、誰もが助けたくなるような全開の顔で助けを請つてきた。

「旅の人、僕等の街を助けて！」のままじや、このままじやこの街は…「うわ～ん」

「わかつたボウズ任せとけ！オレ達が助けてやるからボウズは街中走り回つてこの事を伝えるんだいいな？」

「うん、わかつた！」

走つていく少年を見送り、気合に充填走り出そうとする慶達を呼び止める声がする。

「アンタ達、持ち物改めた方がいいよ」

その青年風の男は意味ありげに笑つている。

「今そんな事してゐ暇は…、あ～～！」

答えながら腰の辺りを弄つて異変に気づいた。

腰のベルトに挿した大切なSGが無くなっているのだ。

「慶君まさか何処かにおとしたんじゃ」

顔が青ざめる慶に男は続けてこう告げた。

「違うよ、さつきいたる? ウォーアウルフがどいつとか叫んでたガキが。アイツがスつてつたのさ」

「そんな、何故!?

「アイツの名前はルチアーナ。こいら辺で有名なスリ兼狼少年さ」

世の中に逃げてる途中に待てと言われて待つ人間がどれほどいるか、答えは限り無く〇に近い。

街中で繰り広げられるラン&チエイス。

街をどれくらい熟知しているかなんてものはある程度の実力を持つ追いかける側からはあまり関係の無いもの。

よつは見失わなければ万事OK。

「待てーーー！」

「つむせー、いい加減諦めろー！」

「誰かー、そいつ捕まえてくれーーー！」

「へつへーこの街にオレを捕まえようなんて奴はいないのさーー！捕まえたきや自分でやつてみるーーー！」

「ねえ、慶君、私のUGで捕まえようか？

「いこままでやつたら、自分で捕まえなきゃ気がすまねーーー絶対オレが殺すーー！」

「殺すつて主姫変わつてゐるな…」

「それでも食べるとかー！」

ルチアナが蹴り倒した樽の群が「ロロロ」と転がつてくる。

「そんなん、」うしてくれるわー！」

と、調子に乗つて大きく振りかぶり、先頭のタルな打撃を加えるとバキンと音がしてタルが凹み、慶の腕が妙な音を出した。

卷之三

アホ、アホ、超人にもなつたつもりかドまぬけがー！！

「殺、殺、ぶつ殺しじやう！」

こんな感じでクレー・ジユタウンを所狭しと駆け回る慶達。
どれくらい走ったかは本人達にもわからなが、こういう物の終わり
は結構呆気なかつたり、

その車は突然現れた。いや、ルチアーナが勝手によそ見しながら飛び出しだけだが。「コラガキ！死にてえのか！？」

当然の決まり文句が飛び出すが、ルチアーナ本人は腰を抜かして歩道に座り込んでいた所を慶に掘み上げられそれどころではないようだ。

「やつと捕まえた。さあ、オレのUGを返せ!」

「嫌に決まつてんだろ。アホかオマエは！ まあ知性に欠けた顔つきしてるものなんあ、親が可哀想だぜ」

「ほ、ほお… 口は達者だな？ 覚悟は出来てんだらうな

ギヤーギヤー「つるせく騒ぐ」一人に文句を言つタイミングを外したと
いうか、無視される運転手。

そんな危うくルチアーナを轢きかけた運転手が運転していた車の後
部座席から紳士姿の男が降りてきた。

「あれ、市長のタリスさんじゃないか？」

それを見た人々は今まで立ち止まつともしなかつたのに、立ち止
まる所か拍手まではし始める始末。

「オマエ、タームの次男坊のルチアーナじゃないか？」

「オマエ、タリス…！」

今までのルチアーナとの雰囲気の変わりよつに慶もタリスの方を見
る。

「ハツ、タームが死んでからどこに行つたかと思つたらこんな所で
こそ泥とは、流石あのクズの息子！ 落ちたといつか、まあお似合い
だな」

「父さんはクズじゃない！」

「あのボロ雑巾のように死んだ男のどこのクズじゃないのかな？ 早
く貧民街に帰れクズ。私の清潔な街が汚れる」

「く、クソツ、クソツ……！」いつかオマエなんか…」

「オマエなんか…なんだね？その続きに来る言葉は、え？言つてごらん」

「帰る…！」

ルチアーナは慶の手を振り払い慶に「Gを渡すと貧民街の方へと歩いていった。

「面白い光景だな。『ミミが自分で『ミミ箱に帰つて行くぞ』

酷い言葉だ。

人を「ミミだと言うのだ。しかし、それ以上に慶達を困惑させたのは周りの人々の反応だ。

自らの街の長が人を「ミミ」と言ったのを咎めるどころか、それを聞いて笑つているのだ。

異常だと感じた。

慶は慶なりに色々な人に会つてきたりましたが、今日の前にいる彼らはそのどれとも違つた。

彼らには悪意がないのだ。

純真に人が人を虐げているのが面白いよつだった。
良識ある悪人より、ずっと質が悪い。

なにせ自分達の行為の意味が、考への異常さが分からぬのだから。

「笑うな！！」

慶の怒鳴り声に一瞬静まり返つたが、しばらくヒンヒンと話すとやがてタリスは去り、人々も何事もなく歩き始める。

「慶君、」

「リリにいるのは人じゃない」

そんな慶の姿を見て古ぼけた格好をした老人が近づいてきた。「アナタ方、ルチアナ坊ちゃんのお知り合いですか？」

「アナタは？」

まだ行き場のない怒りに震える慶の代わりにミーシャが聞くと老人はペコリと一つお辞儀をした。

「私、坊ちゃんの父上、ターム様の元執事だったクシナと申します」

老人の話ではこの街の前市長こそがルチアナの父親、タームだったということだ。

かつこのこの街は飛行船の補給地点としてそれなりに繁栄した街だったらしい。

しかし、都会出の副市長タリスにはタームの政策は不服でしかなかつた。

街をもつと発展させ、こんなごじんまりした街ではなく都会にも負けないような街にしようと画策するタリスと、今まま平凡に暮らしていくつするターム。

真っ向から対立した意見。

どうにかタームを追放したいタリスだが順当に市長選挙で勝とうとしても、タームの支持率は圧倒的。とても勝ち目はない。

そこでタリスはタームのスキャンダルをでっち上げ、役人に賄賂を送り、今の地位を買つたのだった。

市長になつたタリスの政策により確かに街は豊かになつたが、殆どの町人は貧民街に押し込められ、タリスに協力した僅かな人々と都会からやってきた成金だけが裕福にくらす街へと変貌してしまつたのだ。

貧民街へ追いやられたタームは病氣を患い、死に、ルチアーナも今のように盗みで生きるようになつていつたそつだ。

「坊ちゃんは未だ闇の中にはいるように誰にも心を開かずに生きています。旅の方達、もしまだルチアーナ坊ちゃんに会つ事があれば是非話だけでも聞いてやってください。人と話し、信頼する事を思い出せばきっと昔のような良き子に戻つてくれるハズです。お願ひします」

慶達がクシナの話を聞いている頃、

貧民街、ジャンクショッピング裏。

ルチアーナが歩いていると男達の話す声が聞こえてきた。

「では明日、夕刻にメインストリート及び市長宅を襲撃する。準備に抜かりはないだろうな？」

「当たり前だ。こつちはあの市長共々この街をぶつ壊す為にアンタらと組む前から準備してきたんだ」

「なら結構。」

身を隠して一人の男の企みを聞いていたルチアーナ。そつと、見てみると衝撃的なものが視線の先にあつた。

蛇が剣に巻きついたタトゥー。

それはジックス盗賊団の証。

つまり、明日の夕刻、この街は盗賊団に襲われると言う事だ。しかし、ルチアーナにとつては盗賊団を手引きしている男の方が衝撃的だつた。

「兄貴…！？」

そこにいたのは前市長タームの長男でルチアーナの兄、シユトルフ。その姿は慶達にルチアーナの事を教えた青年そのままだつた。自分の兄が盗賊と連んで街を襲う！？そんな、バカな。と、頭をめぐる考えの波が落ち着く前に駆け出したルチアーナ。

「貴様、待て…！」

止まる訳なく駆け抜ける。

「クソッ、逃げ足の早いガキだ。早く殺さねば。計画が漏れる」

「大丈夫だよ。アイツはこの街で有名なほら吹きだ。誰もアイツの言つ事なんて信用しやしない」

「しかし万が一と言つ場合が、」

「アンタも心配性だな。大丈夫さ。計画は上手くいく。」

「もし、さつきのガキのせいで計画に支障が出たら貴様にも死んで貰うからな」

盗賊団の男はナイフを取り出すと少し離れた場所で寝ている浮浪者の額にそれを投げ刺した。

「わかった…か？」

頭から血を吹きながら先程と変わらぬ姿勢で痙攣する浮浪者。やがて動きはなくなり、死が訪れるのに時間はかからなかつた。

脅しじゃない、本気だとアピールする為に適当に人を殺す。

適当に命を奪う、

下衆め、

と内心思いながら同時に頬もしくも感じた。
人を殺す事に抵抗がまるでない。

あつと、計画は上手くいく。

男を送り出すとショトルフはルチアーナが駆け抜けた先を目を細くしていつまでも見ていた。

世界最高予讐者の印記より一端抜粋したもの。（前書き）

世界立図書館に掲示されている物を一部印刷したものである。

世界最高予言者の日記より一部抜粋したもの。

私がその男に出会ったのは、確かに35歳の誕生日を酒場で人知れず
独りで祝っていた時だった。

田舎が嫌で何か才能があるだろうと故郷を飛び出し放浪するように
諸国を周り、なんの才能もないのだと気付いた時にはもう30歳を
越えていた。

この日は誕生日と言う事もあってか珍しく私の落書きのよつな絵が
売れたこともあり、少々機嫌が良かつたのだ。

その男は私に話しかけてきた時には既にベロンベロンに酔っていた
ようだった。酒瓶を片手に私の隣に座ってきたのだ。

男は持った酒を少し飲むと、アンタみたいに不幸な人は初めて見る
よと言つてきた。

更に続けて才能に恵まれないとも言つてきた。

余計なお世話だ。

と、言つてやつた。

なんで初対面のヤツに言われなければならない？ケンカでも売つて
いるのか？

と、思いながらも内心、

当たつている。オレは見ただけで何の才能もないと分かるほどそんなに貧相な顔をしているのかと落ち込んだものだ。

男は落ち込んだ私を見て話を続けた。

私にはどうやら何事もそこそこ才能があるらしい。

だが決して一番になれるような才能はない。いわゆる器用貧乏を絵に書いたような男だと言われた。

それが不幸なのだと男は言った。

何事もまあまあこなせるが、特出したものがない。だから熱中出来るものが無く、ある程度までいくと飽きてしまう為、私のような奴はつまらん人生を送るか、自分の限界を計り間違えてどん底に落ちるしかないらしい。

男は笑つて言つていたが、聞かされた方は落ち込むに決まつてゐる。そんな私を見て氣の毒に思つたのか男は私に面白い話をしてやると言つた。

男はこの世界が誕生してから現在に至るまで、更には未来の事までを事細かに話し始めたのだ。突拍子もなく奇天烈な嘘かホントか判らないような話しが小一時間程続くと、男は最後にある少年の話をし始めた。

それまでが大まかな歴史を辿るものだった為、少し違和感を覚えたが話を聞いた。

その少年は異世界からやってきて、この世界を滅ぼすらしい。

そこまで聞いて私は酒に呑まれて酔い潰れてしまった。

目を覚ますと男の姿は無く、店主に聞いても知らないと言われた。

私は記憶力にはいささか自信があつたので男に聞いた話を書記にまとめると、それを早速古い本屋に売りに出した。

内容はおふざけだが面白さを買われてなかなか良い値段で引き取つてもらえる事になつたのでその金で故郷に帰ろうと思つ。所詮は平凡が似合つ男だと理解したからだ。

それにもかかわらずあのローゼンと言つて、彼の話には何か形容しがたい説得力があつた。

あの男にはまた会つてみたいものだ。

ガリレイ・シュトラーの日記より抜粋。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9502c/>

Destiny Gate

2010年10月15日22時03分発行